冒　頭　発　言

斯　波　義　信

私の専攻は中国経済史である。そこで地域ということだが、私の受け止め方として、部分と全体の間の interface とか interaction として地域を考えている。地域をあつかうことで全体の中の divergence も convergence も共によく見えてくるという側面が確かにある。その局面から聞いた5つの報告は、第一線の方々のもので非常に充実していた。

角山さんは total picture 、全体的な動勢を世界まで広げて話され、非常に啓発を受ける報告だった。

加藤さんの報告、そして應地さんの適切なコメントは、地域的なものの中にある regularity と irregularity 、そういう非常に意味深長な伏線が施してありよくわかった。

中里さんの場合は、これも水島さんのコメントがあり、この場合ベンガル、その中での植民地支配とかの要素等を加味して話された。 cross sectional な interaction ということからいうと、全体としてのインド、あるいはインド洋世界と絡めて話があると、なおよくわかったのではないか。しかし地域の根本的な問題が話され、その偏差のあらわれ方を見通されていた。

加納さんの場合は、私自身の研究のスタンスからもよくわかった。大木さんのコメントが私の考えている地域と非常に近いので啓発を受けた。

上田さんの報告、これはポジに対するネガというか、普通の観察では低地民とその経済開発地だけを取り上げて、人口がまばらな森林とかがネグレクトされるから、これは盲点をついた問題で、そして全体史とか社会史、環境史からいうと非常に大事だし、未来思考という展望を加味していて重要な発言だった。

はじめに原さんが「発展の地域性」、「発展の個性」ということをいっている。これは若干 ambiguous だと思う。確かにそうだが、いろんな受け取り方がある。例えばマクロ経済学などで考えている状況より、もっと多元なコースがある。それから内因と外因の絡み方というものをどう考えるか。近代化の歩みにしても、中国史のそれについて、西洋の研究者は清の初めから、日本の研究者は16世紀くらいからをスコープに入れて論じている。これは内因というものを考えて議論しているからだと思う。技術と環境という問題も、地域史の中の一つだろう。自然というのは技術の一部であるという目で見れば、地域の発展は、環境問題、それに対する生態的な interface といったものが非常に意味を持つ。植民地主義を経済外とするのは間違ってるかもしれないが、経済外的なもの、中里さんと加納さんがいわれた植民地主義が地域に投影されているということは大事な点だし、例えば文化とかエトスとかの経済外の要素も多様性、

あるいは地域の個性につながってくる問題である。

すべてこういった話は地域、あるいはその diversity、そういう問題に関わっているが、もう一度問題を元へ返して、共通のコンセンサスとしてどういうものができているかを、全体と部分、そして地域研究のもたらすユーティリティーというところから考えてみたいと思う。

比較史の用法は三角構造（図１）を持っており、その一つは原さんがいうような普遍理論の妥当性を並行現象を証明してゆくという形で比較を考える。しかし、もう少し進んでパラダイムとの違いがわかってくると、 contrast oriented 、 difference finding といった比較になってくる。今回の議論で多様性の問題が強調されていた。これはベンディックスの『国民形成』、ギアーツの『 Islam Observed 』、ランクの『征服と商業』などの対照志向の比較のディスカッションに出てくる。それを更にもう一つ進めると、マクロアナリティック、あるいはマルティヴァリエートな多変量の比較に進む。ムーアの『社会起源』とかスコーポルの『社会革命』とか、ムルダーの『日本、中国と近代世界経済』などがそれで、要するにマクロでクロスセクショナルな比較をする。そこで新しいパラダイムが生まれてくれば、それが一つのモデルと化して、再び図２のように円環していくという。比較史はこのように円環しながら洗練されるというスコーポルの考えがある。多元比較、多変量比較は、計量化を伴うわけなのでユニットを必要とする。どのユニットがいいか。一番適当なサイズを使うことになる。世界経済といっても Analytical units としては、 household , community , region, nation, continent , world , mini－worldが考えられる。その中で当面、 Regional Study, R. Sciences が問題にしているのは、例えば中規模の今回の東南アジア世界ということなので、それを上手く組み立てていくことは一つの方法だろうとは思う。

THEDA SKOCPOL AND MARGARET SOMERS (comparative Studies in Society and History, 22 : 2. 1980)

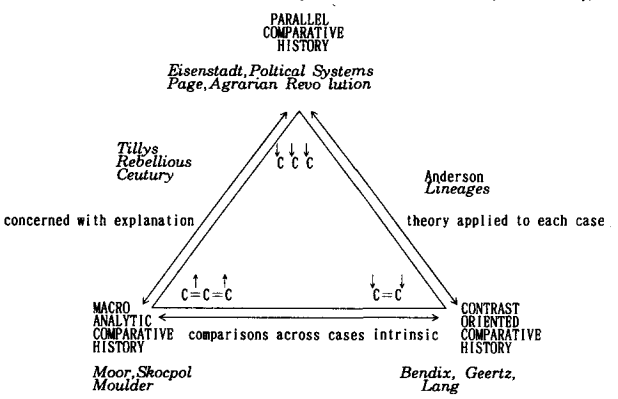

図１　比較史の三角構造

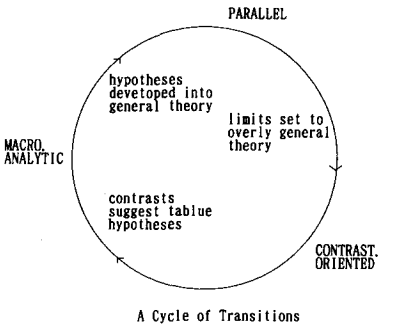

図２　推移のサイクル

もう一つの問題は、比較をするといった場合、社会間の比較、社会内の比較（例えば西インドと東インドと南インドのそれとかいうレベルもある）が基本である。その上でこの２つをまとめ、統制された比較にもっていく。加藤さんが引用されていたキャロルスミスも、『Regional Analysis』という本の中で具体的な戦略をいろいろ書いている。具体的には、中心地群が作るノーダル（結節状）システム、あるいは集散港のネットワークということになる。その場合、中心地（central−place）論は数量的な分析を進めるためには、非常に好都合な elaborate されたセオリーだと思う。ただし、この central−place 論をもし東南アジア地域に使おうとすると、物、サービス、商品、人、そういった flow がよくつかまえられないので、当面はもっと緩いネットワークのシステムとして考えていくことはできるだろう。

もう一つ、時系列の問題である。どこまで、どの時代に焦点をあてるか。角山さんは世界資本主義システムは19世紀が大事だといわれたが、確かにそうだが、比較ということは相互依存性ということを前提としており、特に世界経済ということになれば、何時からそういう状況になったか。プロトの先行時期の問題としては17, 18世紀というのも合わせて考えないといけない。加納さんの場合でいえば、proto−colonial, colonial, post−colonial といったような時系列が示されていた。比較の時間枠組みというのは自ずから出てくるだろう。必ずしも角山さんがおっしゃるような19世紀というところだけに絞ることはないだろう。特にアジアの場合は、変化の内因に絡む先行時期の問題も必要だと思う。アンソニー・リードは1450年〜1680年の「風下の国々」（SEA）の動き、その後の窮乏化を西洋や中国と比べて注目している。

さて、中国について行われている比較研究の事例を、このプロジェクトにひきつけていえば、加納さんのいう華南、これを含めた広域の中の比較になる。スキナーは central−place theory の手法を突き詰めて、水運という技術変数の効率を考えて、分水嶺をもって地域区画をし、８つないし９つくらいの地域に分けた（図３）。各地域でシャドウのあるところがコアで、そのまわりが周縁部である。これは非常に精細な比較、分析には向いており、よくできた理論だと思う。ただし先ほどいったように、物や人や金融の flow という問題がある。スキナーの理論のまま機能地域ということを考えると、その際の各地域の発展の指標は、A．スミス流の分業と産業の特化が一つ、もう一つは cost distance である。中国では何が地域を基本的にまとめる要素であるかというと、結局は水運と海運である。これをふまえ、分業と特化、つまりは社会の商業化、都市化のプロセスを加味すると、スキナー流のこの絵になる。しかし、スキナー、パーキンス、ムルダーという人達は、中国の前近代の遠隔地間の取引を過小評価する。だから、各地域の割拠を強調しがちである。

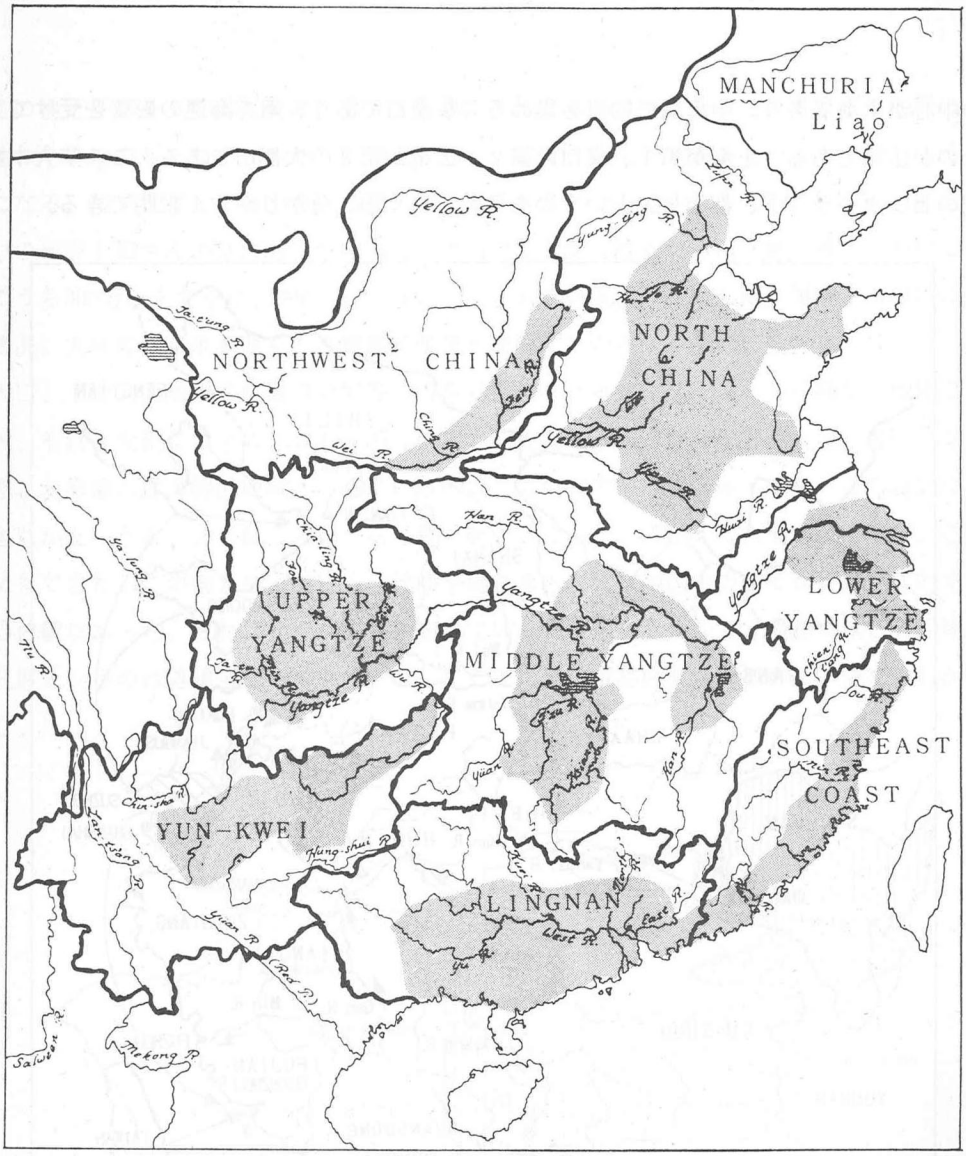

図3　中国のマクロリジョン区分（陰影は各大地域のコア）

しかし、もう少し大きな流れ、いま問題になっているような国際分業だとか、海運による海域のブロック化とかいうことになると、水運の発達をもう少し広域的なものとして考えるべきで、図4のようになる（王業鍵の近作, 1992）。これで見ると、揚子江は交通の動脈で、それを補助するものとして南北の大運河と湘江、漢水（湖南湖北）があるし、沿海地帯に南北方向の海運がある。中国の社会経済の発展の中で非常に大事なのは、いかに水に近いかという問題である。そういうことから、自ずから発展地域は限られてきて、揚子江流域しかも下流域、そ

この中心が上海であり、中流域で物資を集めるのが漢口であり、南方海運の影響を受けて発達したのが広東である。上海が第１、漢口が第２、広東が第３の大都市である。ここで大木さんの例のヒンターランド、都市化論というのを考えていくと、分かりやすく説明できる。

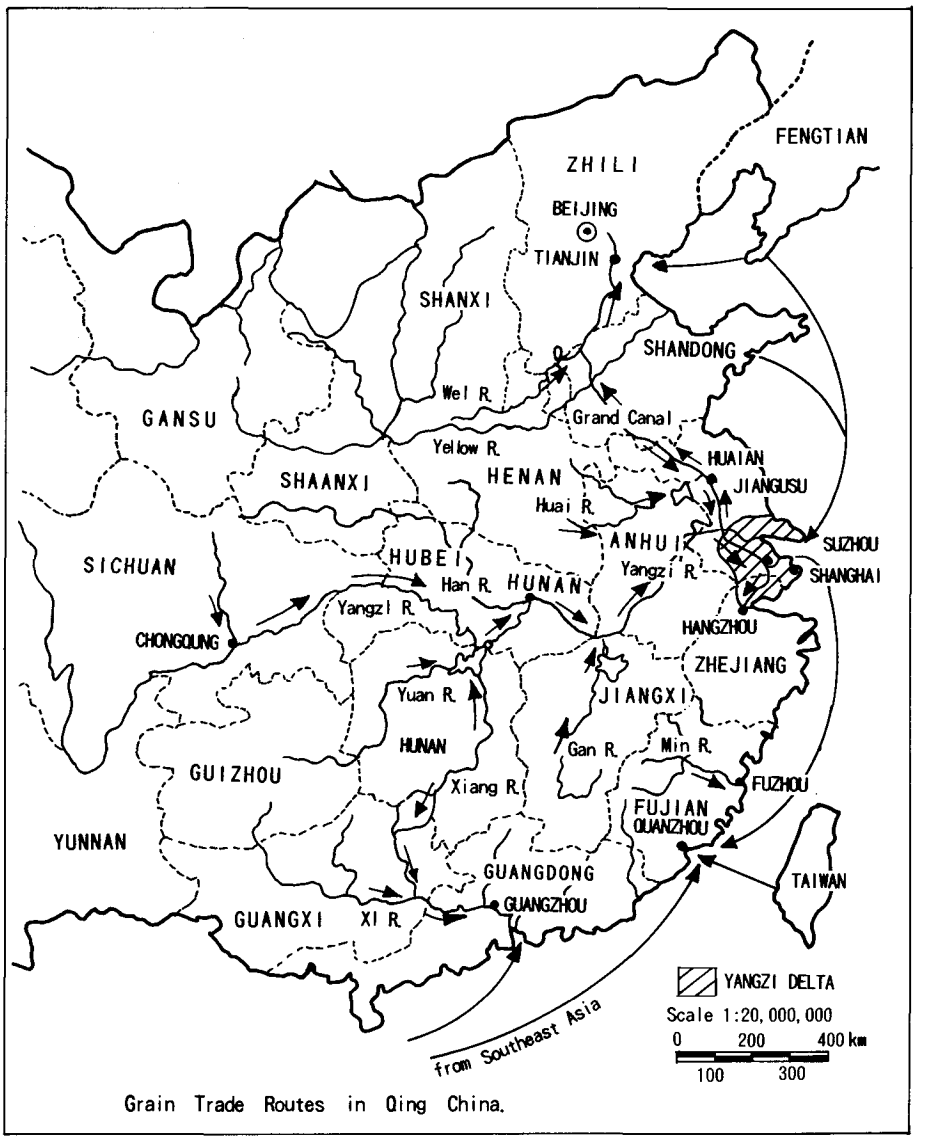

図４　穀物流通ルート

この揚子江デルタで繊維産業、第２次産業がどんどん起こってくると、食糧不足地帯になる。奥地の中進地でもまねをしてコピー商品を作り、福建とか広東も揚子江デルタと同じような状況になる。揚子江デルタは上流に食糧供給地を求めるわけであり、1,500万石から2,100万石くらいの米を上田さんの話にあった四川とか湖南湖北とか江西省から下流域に運んだわけである。そのうち300万石を北京に、100万石くらいづつを広東や福建に供給した。加納さんの話にあった状況、大陸部から米を運んで島嶼部で産業が発展するのとよく似ている。

人口、土地、土地税の収益の分配等の時系列変化をクロスセクショナルに細かく地域ごとに調べ、それを大胆にまとめあげると図５のような先進地、中進地、後進地という地図になる。現在、海岸部の経済特区地域といっているのは、この図でいう先進地である。これはいつからできたかというと、10世紀くらいから福建で起こっており、清朝までに海岸に沿って、この形ができてきた。この動きは上田さんの比喩を借りると、常に中国史の中では、ポジに対するネガの位置にあった。それは北京からものを見ているからそうなるので、実際にはこの沿岸地帯の発展というのは連綿と続いていた。そしてそこに海外貿易の発達が加わり、更にこれが一層進む。

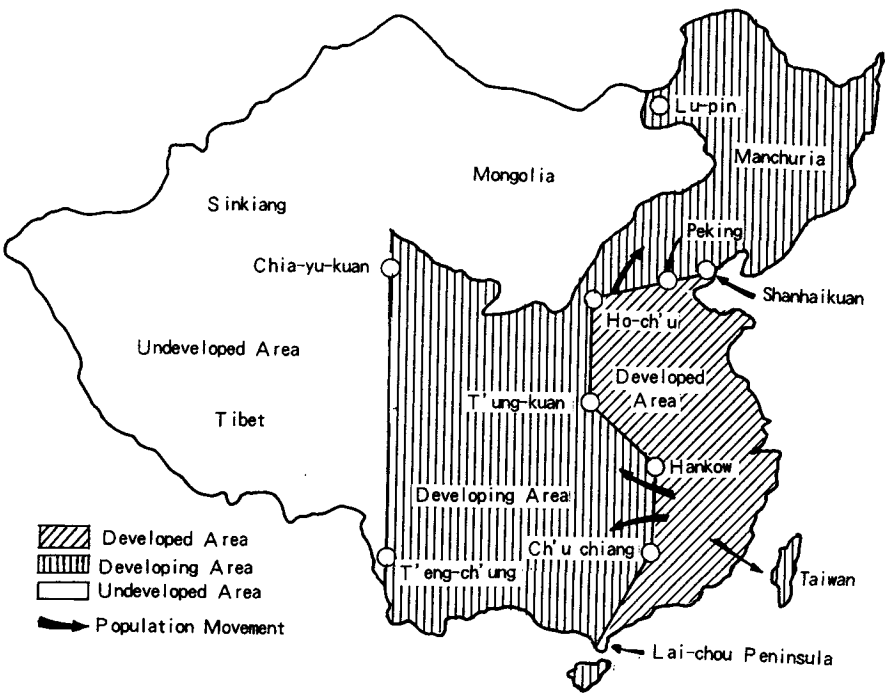

図５　清朝における先進地、中進地、後進地

これはペリフェリーアズセンター、周縁が中心になるという問題である。中国史ではいつも同心円的に真ん中から発達すると誤解されてはいるが、仏教、西洋の学術や技術、キリスト教とかの受容は全て周縁から起こっているので、現在、経済がもし開放されてどんどん発展するとすれば、非常に大きな構造的な変化である。そうなってくると、今度は上海とか広東がメガロポリスになって、東南アジア諸国がこれとどうつながるかという問題となる。広東とか福建などについても、スキナー風のクロスセクショナルな分析が出始めている。それと対比すれば東南アジアではどういうパターンを考えるか。例えば、内陸型の海上王国とか沿海の集散港都市とその後背地とか、東南アジア独特の状況に見合ったユニットについて数量化の基礎データが集まってくれば、比較対象に充分なり得る。そこまでいかないにしても、ネットワークのシステムは考えられる。参考までに濱下さん（図6）と家島さん（図7）のネットワークを挙げておこう。一つの地域として考えた場合、分析単位としての地域をもう少し明確にして、その中でサブシステム、リージョン、ローカリティーというところで少し整理をすると、中国関係史料と突き合わせて研究ができるのではないか。そして、そういう点でコンセンサスができた上で、次は東南アジア地域に焦点を集めてやれば、かなりはっきりした映像がでてくるのではなかろうか。私が考える地域は、parts and whole の集合、それが地域である。東南アジア地域の考察をそれ自体に止めないでで、隣り合う地域と絡めて有機的に関連づけるとき、切口を合わせることが望まれる。時系列はその一つであろうし、また幾通りかのサブリージョン、サブシステムの整理も必要ではなかろうか。

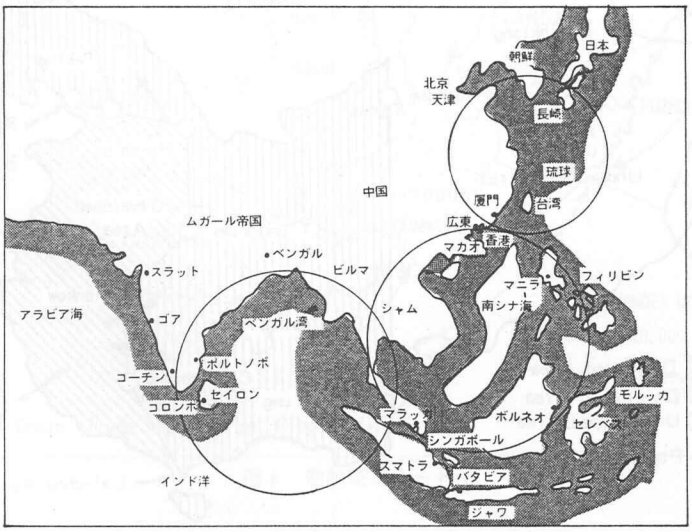

図6　インド・東南アジア・東アジア地域交易圏の相関

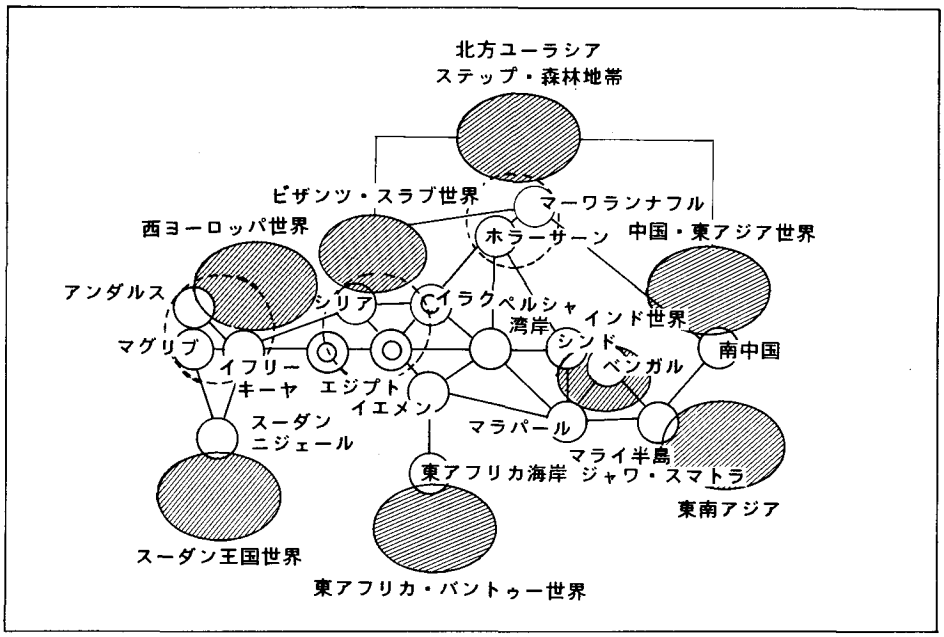

図7　イスラム世界を構成するネットワーク構造と異域世界（模式図）

海　田　能　宏

太平洋戦争が始まる少し前のこと、リトアニアから大きなユダヤ人のグループがシベリア鉄道を通って、日本海を船で渡って敦賀に着いて、米原を通り、京都、大阪、神戸に滞留して、そこからまた上海とか広東、あるいはアメリカに移り住んでいったということがあった。最近、話題になっているが、当時の在リトアニア日本副領事の超法規的な計らいで、日本の通過ビザを得て、多くのユダヤ人が日本を通過していったわけである。そのときの記録があるそうで、このユダヤ人達が敦賀の町並みの麗しさにいたく感心し、沿線の（敦賀から琵琶湖岸に出て、米原を通り京都、大阪、神戸に行く間の）田園、田舎の景観が非常に素晴らしく、豊かであることに感銘を受けたということである。いま同じユダヤ人が同じルートを通ったらどういうか、私には自信がない。ひどくまばらなスラムだというコメントが出てくるかも知れない。

同じユダヤ人が戦後にイスラエルという国を地中海の東はずれにつくった。いま行ってみると、そこはエジプト、シリア、ヨルダン、レバノンなんかとは画然たる差がある土地利用を展開させている。イスラエルは一種の農業国として、多くの農産物を西ヨーロッパに冬の時期に

輸出して外貨を稼いだりしている。そのシステムは非常に素晴らしく、水一つにしても、わりと乾燥した地域を含むので、雨水、ゴラン高原から流れる川の水、地下水、海岸の塩辛い地下水、あるいは都市下水を再処理した水等を細かく計算してパイプラインで国土に分配し、生産性の高い農業を展開している。彼らはこのシステムに大変な自信を持っている。ただ、どこか1本ボルトがゆるむと全体が崩壊してしまうのではないか。非常にシェイキーというかブリークな感じを与えるような土地・水利用景観を作り上げてしまっている。

日本はラジオ、テレビ、自動車を東南アジアとかいろんな地域に輸出するかたわら、同時にこの景観も輸出しているのではないだろうか。すなわち、多くの場合、荒れた景観を輸出してしまっているということである。例えば、東北タイの場合、そこが生物的資源の原材料の供給地として位置づけられると、あっという間に疎林はキャッサバ畑に換えられ、海岸のマングローブ地帯がエビ池地帯に猛烈な勢いで変わってしまう。そして作物が買われ、場所が買われ、荒れた土地利用に移っていく。加納さんの報告にもあったように、これは最近に始まったことではなくて、この150年ぐらい同じことを繰り返しているわけだが、ゴム、パーム、サトウキビ、コーヒー、次いで繊維作物、トウモロコシ、キャッサバなど、全てが商業化された土地利用になる。我々とアジアとの関わり合いは、これしかないのかという感じを受ける。果たして、オルターナティブなアプローチはないのだろうか。

この重点領域研究のテーマは略称「総合的地域研究」だが、本来の題には、副題がついており、「世界と地域の共存のパラダイムを求めて」という。英語の課題名の方がわかりやすく“In search of a paradigm for harmonized relation between the world and its areas”である。世界と地域の共存のパラダイム、この重点領域研究はこれを狙わなくてはいけない。こういう観点からすると、このシンポジウムで社会経済史の先生たちから学んだことは、現実は現実として、過去の延長上にしか我々と地域との関わりの展望は開けないのかと、いささか悲観的になってくる。私はオルターナティブを無理やりでも探す努力をする必要があるのではないかと思ってしまう。

例えば、「強い空間」が、アジアとか熱帯とか「弱い空間」に働きかけたときの、向こう側のいろんな対応を全部拾い出してみることとか、あるいはいままでは、産業化、工業化が近代文明の物的な基礎だったわけだが、これからはそれが変わって、情報とか交通とか文化活動とかが基盤になったときは、いままでとは違う「発展の形」を見出せるのではないか。例えば、物を運ぶことを止めて、人間に動いてもらう。物をどこから買ってくるのではなくて、我々が旅行してそこで食べて帰ってくるというような関わり方。このようなことが常識になってくる

かも知れない。あるいはいっそのこと、我々の方が「清貧の思想」を探す努力をしたらどうか。例えば、スリランカでサルボダヤ（農村開発運動）がここ四半世紀ばかり続けられている。これは一言でいうと、農村生活改善運動のようなものだが、清貧で穏やかで品位のある生活を、というような夢みたいな目標を掲げて、生活を変えていこう、それも、先進国の豊かさを経由しないで、オルターナティブ・ソサエティーがつくれないものかという運動である。

もし、いま私が言っているようなことは話にもならない、全然どうしようもないことで、やはり近代というのは「弱い空間」の生態を支配するのだとし、そして、もし近代の生態支配というものがどうしても避け得ないのであれば、例えば、この重点領域研究のグループは「少なくとも日本が行なっているＯＤＡは我々の行為のコンペンセイションのみに使われるべきである」と主張しなくてはならないとまで、私は考えてしまうのである。そこに一歩踏み込まないと、地域研究は成り立たないのではないかという気さえしている。

昨日から今日の発表を聴いていて、どことなく「地域」が浮かびあがってきたような気がする。地域科学（リージョナルサイエンス）などでいう15キロ圏、任意に切り出してきたようなサンプルエリア、モデルエリアのようなものでは決してない。また地域住民とか、地域住民運動とかという言葉の形容詞に相当する「地域」でもない。ある国のサブリージョンでもない。角山さんの話を聞きながら、「ああ、なるほど」と思ったのが、“The world and its areas”、「世界と地域」というときの「地域」であって、「地域」というのは、閉ざされていないで、オープンエンドで、状況によって変わっていくのだが、いつも世界と結びついた「地域」でなければならないのではないかということである。この点で、高谷さんが先年来、主張している「世界単位」は意味を持つと思う。世界単位は客観的にあるのではなく、高谷さんから見たら世界はこう語れるのだという世界と地域の関係が見えてくる、日本と地域はこんな関係にあると見えてくる。そのとき、うっすらと浮かんでくる範域を取り出すと、それが地域である。こういう努力をこのグループはしていった方がよいとも思うのである。